

投資でもうけた大経済学者リカードとケインズ(3)

中湖 康太

ケインズの宿敵はリカード

リカードは、経済学者として、また投資家としてケインズのライバルでした。ケインズの「雇用、利子及び貨幣の一般理論」(以下「一般理論」)を読むと、それがよくわかります。ケインズは古典派経済学(=リカード派経済学)を批判しながら自らの新しい経済理論を展開します。しかし、ケインズは一方でリカードの理論展開における明晰さ、したたかさに舌をまいています。ケインズは次のような趣旨のことを「一般理論」の中で繰り返し述べます。「リカードは自らの経済理論の性格をよく知っていた、その理論が適用できる範囲を領域を踏み外すことはなかった。それは不用意にその範囲を踏み越えてしまった明晰さに劣る後継者たちとは異なる」と。

リカードは、高等教育を受けていない在野の経済学者でした。リカードは有能な証券ブローカーであり、債券引き受け人(アンダーライター)であり、投資で大もうけし、ロンドン郊外のギャトコムパークの大邸宅に住む大地主となり、論理的、数理的、分析的な明晰さで古典派経済学を完成させました。数理的というのは高等数学を使うというのではなく、数理的センスという意味です。リカードが生きた時代のイギリスは穀物法による保護貿易で、地主が恩恵を得ていたわけです。リカードは地主としてその利益を享受しながら、自由貿易主義を唱えました。これも、ケインズには皮肉に映ったに違いありません。

ケインズが大学教授にならなかったのはリカードの影響?

ケインズがアカデミックな大学教授という道を選ばなかったのは、リカードの影響があるのではないかと私は推測します。大学を卒業し、当初は公務員となりインド省に勤め、後に、イギリス大蔵省の首席代表になる、投資会社や保険会社の取締役になり、投資のアドバイスをする、また自ら投機、投資を行う在野の経済学者でした。ケインズは、パブリックスクールの名門、イートン校をトップの成績で卒業、ケンブリッジ大学のキングズカレッジに入学するという典型的なエリートコースを歩みながら、職業として大学教授の道を選びませんでした。当時のイギリスの経済学会に君臨したケンブリッジ学派の総帥、師であるマーシャルの誘いでケンブリッジ大学で講義することもあったようですが。

経済学は金もうけの手段でもあった

リカードがそうであるように、ケインズの「一般理論」も、投資家でなければ出てこないであろう、鋭い視点で分析を展開していきます。ケインズは、経済学だけでなく、ヴァージニア・ウルフやリットン・ストレイチーが属するブルームズベリー・グループに入り、文学、芸術にも深い関心を示しました。自らの知性をひけらかし、エリート主義であったようですが、また、型にはまらない人間だったのです。ケインズは自由人であったということでしょう。自由人であるためには、お金が必要で、そのために投機、そして投資に向かっていったという面があります。つまり、経済学は、ケインズにとって、その知性を刺激する学問であると同時に、経済という現実の大問題に対処するために必要な実践的学問であり、また、様々な活動による報酬や投資によって金もうけをするための手段であったのです。ケインズは、1929年のニューヨークの株式市場大暴落に端を発する世界恐慌の時代を生きた人であり、また不況脱出の処方箋を書いた経済学者でした。

リカードの呪縛からの逃走

ケインズは、自らがリカード経済学に洗脳されていたこと、それから逃れることが如何に困難なことであったかを告白します。「一般理論」の序で次のように述べています。

本書は、筆者 (=ケインズ) にとって、(古典派経済学=リカード派経済学からの) 長い逃避の闘いであり、もがきであった。ほとんどの読者にとっても同じことであろう。それは、洗脳されてきた習慣的な思考や表現からの逃避である。・・・我々の頭脳に染み込んだ、古い考え方 (古典派経済学=リカード経済学)、その呪縛から逃れることが如何に困難なことであるか。それさえできれば、ここに書かれた新しい考え方は極めて簡単かつ自明である。

The composition of this book has been for the author a long struggle of escape, and so must the reading of it be for most readers if the author's assault upon them is to be successful, —a struggle of escape from habitual modes of thought and expression. The ideas which are here expressed so laboriously are extremely simple and should be obvious. The difficulties lies, not in the new ideas, but in escaping from the old ones, which ramify, for those brought up as most of us have been, into every corner of our minds.

古典派経済学の仮定はスペシャル・ケース：現実に適用するのは危険

ケインズは、古典派経済学の仮定は一般的には成り立たないと主張します。確かにケインズのこのような主張は、1929年10月のニューヨーク株式市場の大暴落に端を発する大恐慌を見てのこととも言えるでしょう。しかし、私はそれ以上にケインズの投資家としての経験からくると思います。現実の為替市場、株式市場、商品市場での投機、投資で、現実の市場がどういうものか。破産しかかり、父親に助けてもらった若き日の為替市場での投機の失敗が身に染みた筈です。若きのケインズは、まだリカードの呪縛から逃れてはいません。古典派経済学の視点で市場をみていたでしょう。しかし、現実の市場は古典派経済学が想定するものとは全く違う、投機の失敗で骨身に感じていたはずで、ケインズは次のように言います。

私は古典派の仮定はスペシャル・ケースのみに当てはまり、一般的なケースには適用できないと主張する。そのスペシャル・ケースは現実の経済の可能は需給均衡のうちの一つであるが、極めて限定的にしか成り立たないものである。

さらに、古典派経済学が想定するスペシャル・ケースの特徴は、我々が生きる現実の経済社会とは異なっている。したがって、それを現実の経済社会に適用するのは間違いであるばかりでなく、危険である。

I shall argue that the postulates of the classical theory are applicable to a special case only and not to the general case, the situation which it assumes being a limiting point of possible positions of equilibrium.

Moreover, the characteristics of the special case assumed by the classical theory happen not to be those of the economic society in which we actually live, with the result that its teaching is misleading and disastrous if we attempt to apply it to the fact of experience.

ちなみに、当時の古典派の大経済学者であるアービング・フィッシャーは、1929年の株式市場暴落の数日前に、「株価は、恒久的な高い高原のようなものに到達した ("Stock prices have reached what looks like a permanently high plateau.")」と発言し、株式市場の暴落で大損失を被り破産に瀕しました。ケインズの言う、危険なことをしたためでしょうか。勿論、投資の失敗は学者としてのフィッシャーの評価とは別であるべきです。

(2014.12)